

---

# クリスマス妖怪

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマス妖怪

### 【Zコード】

Z3029D

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

クリスマス、子どもにプレゼントを買ってやれない男の前に、不気味な子どもが、どこかへ導かれるのを見る……。

サンタクロースという人を知っていますか？ 勿論みんな知っているでしょ。

知らない人は、本当に地球上に生きている人間なのでしょうか？ と問いたくなるかもしないくらい、サンタクロースというのは有名です。

しかし、サンタクロースという人はすごいですね、一日で世界中の子どもにプレゼントを配りてしまうのですから。

「……」

でも、勿論大人になられた皆さんには存じているでしょうが、サンタクロースというのは、実在の人物ではありません。

当然ですよね、そんな人間がいたら、世の中の宅配業者の方々は路頭に迷ってしまうことでしょうから。

ここにいる二十歳代の、結構どこにでもいそうなサラリーマンがいます。どうにも浮かない顔をしているようですね。

そもそもそれは、平社員であるこのサラリーマンの方は、お金がなくて子どもに物を買ってあげられないのです。

「父さん、駄目な奴だな……」

今にもおいおい泣き出しそうな顔で、彼は子どもに対する侘びを述べていました。

「せっかくのクリスマスだつていうのに、何も買ってあげられないなんて……不景気のせいにしたいけど

彼は、ふいに玩具屋に入つていく、自分より凜々しそうな会社員風の男を眺めました。

その男は、十分ほどでその玩具屋から出てきました。も「田屋つけてあつたのでしょうか。

出てきた男の人の手には、クリスマスの包装がされた玩具が入っていることがよくわかるような、透明性の薄い袋が手にぶら下がっていました。

なんだかとても大事そうに、それでいて嬉しそうな顔をしています。恐らく子どもの喜ぶ顔が目に浮かんで、思わず「ココロしてしまっているのでしょうか。

男の表情を見て、さつきのサラリーマンは、とても羨ましそうに、それでいて悔しそうにしていました。

でも、自分ではこの格差をどうすることも出来ません。大して業績が良いわけでも無い男には、あんな普通の人間が掴んでも良いだろ「幸せすら、許されません。

「帰るわ……」

とてもガツカリしながら、男は帰路へ着こつとしました。

子どもに一体どんな言い訳をしよう、と考えながらの、とてもとても憂鬱な帰路でした。

しかし、そんなガツカリした雰囲気を全て打ち払うような、不思議な光景を男は目にしました。

「あれ？」

子どもです、子どもが歩いているのです。ここは繁華街と言つても過言ではないような都会です。

そんなところに、小学生にも満たないような子どもが、たつた一

人で歩いているのです。

迷子かなと思いましたが、その足取りはとてもしっかりとしています。というより、迷子なりとつぐに泣き喚いていても、おかしくはありません。

何か、明らかに不思議な様子をしている子どもを見れば、流石にネガティブまっしぐらだった男の心だって惹かれます。

「何してるんだ?」

当たり前の疑問を抱きつつ、男は子どもの後を追いました。子どもはどんどん人気のないところへと向かっていきます。

追つていくうちに、辺りは段々と霧のようなものに包まれていきました。その霧はどことなく冷たく、男の恐怖心を煽りました。

そんな恐怖心を拭いながらも、男は迷い無く進んでいく子どもを、必死に追いました。

自分でも、一体どうしてこんなことをしているか、全くわかりませんでした。

そして、とても眩しい光に包まれた時、景色は夢のように変貌しましたのです。

辺りは一面の銀世界。遠くの風景に森らしいものが見えるような、都会とはまるつきり情景の違う、雪原がありました。

そんなところに、男はいつの間にか放り出されました。後ろを振り返っても、今まで来た道はありません。

気づけば先ほどまで追ってきた子どもすらも、どこかへと消えていました。

ここはどこなのかと、ただ呆然と見渡してみると、目の前には人

家らしい、山小屋のような小さな家が建っていました。  
人家には、とても暖かそうな灯火がついていました。

「寒い……」

男は冷静に今の状況を分析しようとしましたが、その前に寒さが  
彼を襲いました。

「とりあえず入れてもらおう。」  
「はどこかも聞いてみよう」

兎にも角にも防寒をしないことには、彼も終いには凍え死んでしまいます。

彼はひとまずその家に非難させてもらうことになりました。

「ごめんください」  
「はい」

明らかにシワ枯れた老人の声が聞こえてきました。とても優しそうな雰囲気を漂わせながらも、それを通り越したお人好しの声にも聞こえます。

男は、これは助けてもらえるかもしれない、期待を寄せました。

「ここへ迷つてしましました。道もわからないし、防寒具もない  
ので、どうか火に当たらせていただけないでしょうか」

「それは大変だ。どうぞ中へ」

あっけなく小屋の中に入ることを許された男は、これは幸運だったと小さく神と老人らしい家主に感謝しながら、家に入つていきました。

「狭いところですが」

「……」

老人は、そういうて暖炉に男を誘導しようと手を差し伸べました。しかし、男は目を見開いたまま、動きません。

不思議に思った老人が、彼の顔を覗いながら、どうしたのかと訪ねます。

男は、間抜けな顔をしながら、老人の姿を指差して、一言言いました。

「サンタクロース……？」

「そうですよ」

「こじは一体……どじですか？」

「強いて言つのなら、サンタの世界ですよ。まあとにかく、火に当たりながらお話しましょう」

そういうて、サンタクロースと名乗る老人は、男を暖炉まで誘導しました。

終始招かれた男は、信じられないような顔をして、キヨロキヨロと辺りを見渡していました。

「あなたは、サンタの世界に迷い込んでしまったようですね」

「その、サンタの世界というのは、どういうことなんですか？」

「大きくなると、子どもはサンタクロースというものは、本当はないんだと知らされますね」

「それが私の世界の常識ですが……」

「実はそんなことはないのです。」の通り、サンタクロースという者は存在しています」  
「まさか。いつも子供たちの希望を買って与えているのは、私達ですよ？」

自称サンタは、フウーッと息を吐いて、天井を見上げました。そして、また男に向き直ります。

「私達の本当の仕事は、子どもにお金でプレゼントを買ってくれることではありません。あなた方が買ったプレゼントにて、夢の力を授けることです」

「夢の、力？」

「そうです。夢の力というのは、眠って見る夢は勿論、将来なりたい夢とか、明日叶えたい夢とか、そういう感情を、いつまでも途切れることがないようにするための、不思議な力なんですね」

「そんなことを、サンタさんはされていたのですか……」

「まあ、それがいつの間にか伝承が変わつて、プレゼントを買ってくれる者達といふことになつてしているのですよ」

男はそんな壮大な話を聞いて、思わずなるほどと頷きました。

「でもそれって人間の出来るようなことではありませんよね？」

「ええ、私達は単刀直入に言えば、人間という生き物ではないでしょう。あなた方の国で言うところの、『お化け』や『妖怪』、あるいは『化け物』の類と言えるでしょう」

「そんな、サンタさんを化け物だなんて……」

「さらに言つと、我々のこの力は、プレゼントや子どもに触れて初めて注げるものです。それで一つ一つの家を回つては、こつそりと窓や煙突から入つて、子ども達に夢を与えていきます」

「知りませんでした……でも、我々といふのは、トナカイのことです

すか？」

「いいえ。流石に一人のサンタクロースだけで世界中を回るのは不可能ですよ。ですからサンタというのは私以外にもいるんですよ。この小屋の地下にたくさん。クリスマスの日が来るまで、毎年冬眠みたいなことをしているのです」

「なるほど、そうやって一年間生氣を養つているというわけですか」

サンタクロースの話を聞いていて、すっかり感心していた男は、自分がここに来た経緯をすっかりと忘れていました。

そして、しばらく話し込んでいたうちにようやく思い出した彼は、子どもがこっちの方に来なかつたかと、サンタに聞いてみることにしました。

するとあっけなく、その答えは返つてきました。

「そこにはますよ」

「え？」

サンタが指差した方向を見ると、そこではさつきまで彼が追つてきた子どもが、気持ち良さそうに眠っていました。

男は、それを見て何故かホッとしました。そして、どうしてこの子どもが導かれるように、ここにやつて來たのかも全て納得がいきました。

この子どもは、きっとこのサンタの世界に導かれてしまったのでしう。だから少々虚ろな様子でここまで来て、結局疲れ果ててここで眠つてしまつたに違いありません。

「微笑ましいですね」

「ええ」

「きっと、サンタさんを信じてここまでやつてきたのでしょうか。健気なものです」

「それは違いますよ。この子は、私が呼び寄せたのです」

「……え？」

男は、サンタの言つたことがわからなくて、突然固まりました。

「サンタはたくさん居ます。しかし、私以外の者達は皆、元は人間なんですね」

「それは……どうして？」

「こうしてサンタ候補を密かに連れてきて、育成しているからです」

「……それは、勿論保護者の人間に承諾してのことですよね？」

その質問に対し、サンタは平然と答えました。

「そんなことあるわけないじゃないですか。好き好んで子どもをサンタにする人間なんて、いませんよ」

「で、でも。こうして毎年子どもをサンタにしてるんですね？」

「それじゃあ人さらいじゃないですか！」

「大丈夫ですよ。サンタ候補になつた子どもは、この世界に来た瞬間、家族や友達等、向こうの世間の記憶から消去されます。あなたは、この世界にいるからまだ覚えていられているだけで」

「……じ、じゃあ、知らないうちに……私達人間の子どもは、こうしてサンタに……？」

サンタが話した衝撃の事実に、男はしばらく茫然自失していました。

もしかしたら、自分達が記憶を消されただけで、実は自分にも、友人にも、もつと子どもがいたかもしれないのです。

自分達は、何も聞かされないうちに、気がつかないうちに、子どもを失っているかもしないのです。

「さて。事情を話した所で、あなたも元の世界に帰さないといけませんね」

「ちょっと待つて下さい……！」

「その様子だと、この秘密を世間に公開してしまったなりで、あなたの記憶も抹消しないといけないんですよ。ただ、あなたの記憶をその場ですぐ消すためには、少しやらないといけないことがあるんです」

「……なんですか？」

「あなたの家には、お子さんが一人いらっしゃいますね。その子をサンタ候補にしないと、あなたの記憶、消えないんですよ」

「ええっ？！」

男の顔から、急に冷や汗が出た。そして、彼はサンタにすぐさま詰め寄ります。

「冗談じゃない！！　俺の大切な子どもを、どうして候補にしないといけないんだ！！！」

「別に良いじゃないですか。どうせ記憶は消えて、あなたには元々子どもが居なかつたことになる。子どもの所有物やら何やらは残りますが、それが誰のものかは、わからず終いです」

「酷い……酷すぎる！！　それで夢を『えているつもりなんですか？　私達の夢も希望を奪つておいて、それがサンタクロースなんですか！…』

死に物狂いで突つかかる男に対し、サンタはさも当然のようこう言いました。

「常識じゃないか、そんなことと、相手を非常識な者と掃き捨てるよつこ、とても冷静に言いました。

「そうですよ。私達が夢を『える』力を使つには、子どもの夢の力が

必要ですからね、こうして人間は日々いろんな場面で活躍して、進化しているんですよ

「ほんこと……許されるものか……」

男は、いつそこのサンタを殴り殺そうと思つて、椅子を持ち上げました。でも、持ち上げたところで彼の動きは止まりました。というより、止められてしまつていきました。何事かと思って男か振り向いてみると彼の身体は、押さえつけられていたのです。どこから沸いてきたかわからぬ無数の子ども達と、笑顔のサンタ達によつて、ガツチリと押さえつけられていたのです。それを見た男は、何か恐ろしいものを感じて、それらを振り払おうとします。でも、力が強いうえに人数が多くて、どうしようもありません。

「さて、そろそろあなたの子どもさんが来る頃です。すれ違いになたが家から出れば、全では無かつたことになります」「嫌だ！」

「ワガママ言つて貰つては困ります。あなたがこの秘密を話さないという確証はないですし、それにここに勝手にやつてきたのは貴方ですから」「い、嫌だ！！ 息子を忘れたくない！！」

「諦めてください。世界の夢のためですか」

気づけば、男はもう扉の前に立たされていました。一人の子どもが、扉を惜しげもなく開けます。

扉の向こうは、銀世界ではありませんでした。とても眩しい光の道でした。

その光の道の向こうから、一人の子どもが歩いてきます。男は、すぐに自分の子どもだと気づきました。

男は、子どもに手を伸ばそうとしますが、それより前にサンタの

部下達によつて、突き倒されたるよつとして、扉から押し出されました。

倒され、下に落す直前、男はこちからせりやつてくる自分の子どもの顔を、しつかりと見ました。目をよく見開いて見ました。そして、叫びました。

「絶対に忘れないからなーー！ 絶対にいつか迎えにいくーー！ 待ってくれ！俺の…………！」

男は、気づくと玩具屋の前に立っていました。どうして自分でもここにいるのか、わかりませんでした。

きっと子どもが欲しくて、思わずこんなところに来てしまったのでしょうか。男はため息をつきました。

子ども連れの客が、お店の中から出てくるのを見ると、男は逃げるよつてその場を立ち去りました。

帰り道、ふと、繁華街の真ん中を、堂々と歩く子どもがいるのを見ました。

とても不思議に思いましたが、男は、なんだか関わってはいけないような心持になつて、その子どもから目を逸らしました。

結局子どもは、人気のない方角へと姿を消しました。男は逃げるよつてにして家に帰りました。

家に帰ると、男の妻が首を傾げていました。

どうしてかと聞くと、妻は足元に置いてあった玩具を指差します。男はギョッとした。どうしてこんなものがうちにあるのだろう、と。

それだけではあります。さうに探してみると、子供も服などもあつたのです。

「きっと子供もがあまりにも欲しくて、こんなもの買い込んでしまつたんだわ」

「そんな記憶ないんだけれど……」

「お互い忙しかったからな。仕方ないよ」

「……ひん」

男の妻は、寂しげに頷きました。何か引っかかるような物言いでした。

しかし、男も男で、どうしても玩具に気がいって、その場を離れることが出来ません。

なんとなく、無意識に男は、その落ちていた玩具を手にもつて、まじまじと見つめました。

すると、どうしたか、男の田からば、ボロボロと涙がこぼれてきました。妻は驚きました。

きっと疲れているんだ、そうに違いないと、男は涙をこぼりながら、ベッドまで逃げるように走りました。

枕に飛びついても、その涙が止まるとは一向になく、しばらくして男は、意味のわからない涙を流し続けました。

そんな夫を見て、妻もどうしてか涙が出てきて、夫の隣で泣き始めました。その涙は、結局一時間ほど止まりませんでした。

三年後、二人の間には、念願の『第一子』が誕生しました。

(後書き)

「サンタさんって人間じゃないよね」という何気ない会話から思ついた一作。クリスマス記念ということで一日で書き下ろしてみました。ファンタジーとなつてますが、微妙にホラーでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3029d/>

---

クリスマス妖怪

2011年1月15日22時50分発行